

はしがき

戊辰戦争は備中松山（高梁）にとって悲惨な被害をもたらした忘れ難い悪夢である。藩主の板倉勝静が老中首座であったため、備中松山藩は朝敵と見なされ征討軍をさし向けられた。藩は征討軍に恭順の意を示したので直接の戦火は免れたものの、一年八か月にわたって占領された。明治二年九月に再興を許された時、藩の石高は五万石から二万石に削られており、藩名は松山から高梁に変えられていた。会津や長岡でも変えられていないのに松山は高梁へ、箱館は函館へと変えられた。全領民は屈辱にひたすら耐え忍んだのである。

戦乱期の藩の実動対策隊のリーダーは三島中洲であったが、監督はやはり山田方谷であった。三島は要点は方谷に相談し結果を報告した。方谷は動乱のただ中、刻々と状況が変化し、重大事件が突発する事態を瞬時に判断して対処した。三島中洲や川田剛等はこの動乱のなかで、山田方谷が稲妻のように閃めかす陽明学の真髓「事上磨練」を瞬時に身につけたという。

まず「戊辰戦争には何の義もない争いであるから、犠牲を払って戦う必要はない。何よりも領民の安全を守るべきだ」と恭順を主張し、皆を説得して平和を守った。

ところが次の征討軍との交渉で示された謝罪文案に「大逆無道」とあるのを見た方谷は一転、「わが板倉勝静侯には尊皇の志殊の外厚く、一度たりとも朝廷に刃を向けたことはない。この四文字は自らの命（方谷は遺言を書き残していた）に代えても受けられない」と言い切った。方谷の命がけの言葉を伝え聞いた征討軍の伊木若狭総督（方谷を尊敬していた）は「軽拳暴動」に代えて交渉を終結させた。

第三に、幕府の老中首座と武士の誇りにかけて、最果ての北の山野に朽ち果てんと思いつめている旧藩主板倉勝静を救うべく奇想天外の手を打った。すなわちプロシア商船を雇い、勝静をだまして箱館から江戸へ救い出したのである。そこにみられた一瞬の決断はまさに陽明学の真髓であり「事上磨練」そのものであった。

戊辰戦争がおさまった明治四年、京都に残っていた会津藩の山本覚馬は京都府の要職にあったが、明治七年アメリカ帰りの新島襄が日本を創り変えるため新しい学校を創るという計画を聞くと心から共鳴し、計画実現のために「同志社」という名の結社をつくり、自分が所持していた六千坪の土地をずい分格安に提供するという熱の入れようであった。

さて新島襄は上州安中藩の江戸藩邸で育ったが、安中藩は備中松山藩とは先祖（板倉家）を同じくする親戚藩であったので、江戸では双方の藩士間には親しい交流があったようで、新島襄と弟は松山藩士の川田剛の塾に通っていた。新島は海軍で身を立てようと思つて築地の軍艦操練所に入所して訓練に励んでいたが残念なことに眼病にかかったため中退した。ところがその頃、松山藩が三百五十トンの軍艦快風丸を購入したので、江戸から玉島港まで初航海をするに当たつて、操艦の経験がある新島に声がかかり、操艦に参加して玉島に到り、松山城にまで登つたという。このような操船が縁で新島の視界はますます海外に広がり、日本脱出を考えるようになる。そんなある時、再び江戸の町で快風丸の船員と会つた新島は「快風丸が近く箱館に行くが一緒に行かぬか」と誘われ、狂喜した新島は「是非つれて行ってくれ」と頼む。こうして新島は語学習得のため箱館に遊学することになるが、乗船許可も遊学許可も松山藩士の助けによつて、無事に許可を取ることが出来たそうである。

こうして新島は箱館に行つて語学の習得にかかり、やがて日本脱出を敢行することになるが、それは誰かの助けなしには実行出来ない危険な企てであった。その危険な作業を助けたのも松山藩士の船員であった。要するに新島は松

山藩士の助けで日本を脱出してアメリカに行けたのである。

明治十三年二月新島が備中松山にキリスト教の伝道に来たのは、その時のお礼に福音をもたらすためであった。

本書は平成二十四年七月十五日、岡山市で「全国山田方谷学会」主催の講演会で筆者が行った講演をもとにまとめたものである。

その基本テーマは「方谷の陽明学」と「方谷の教育実践」である。第二章で取り扱った方谷の陽明学については、方谷が明治六年から九年まで閑谷学校で行った講義をもとにしている。それは方谷の朱子学批判を通して朱子と王陽明との相違点を指摘したあと方谷独自の境地について述べている。

方谷の教育実践については第五章で取り扱っているが、岡本巍、島村久、谷川達海と古稀の老儒山田方谷との魂の交流はこの世に実現した愛の学校であり、終焉の光芒であった。

次にこれらの基本テーマに加えて三つの課題がある。その一は第一章で板倉勝静と山田方谷の人間関係の形成と発展をとりあげた。君臣水魚の交わりは戊辰戦争によって断絶の危機に瀕したが、方谷の奇策の実行によってつなぎとめられ有終の美を飾ったことを述べた。

その二の課題は第三章に陽明学とキリスト教の関係について取り扱った。古くは序論でとりあげた徳川幕府の儒官、林羅山によって熊沢蕃山の陽明学をキリシタンの亜流と断じ非難攻撃したこと、次に幕末長州の戦略家、高杉晋作が長崎でキリスト教に接した際に、これは陽明学だと叫んだことが知られているが、明治に入ってプロテスタントの伝道が活発になされるようになると陽明学徒の中に、比較的多くの受洗者が輩出したと言はれていることを切り口にして、キリスト教徒の知性（内村鑑三、新渡戸稲造、植村正久など）が陽明学をどう評価したかを究明した。

三つ目の課題は第四章において明治初期の近代化が備中高梁においてどのように展開したかを論究するため、社会

を四つのサブ・システムすなわち政治、医療、教育、宗教の側面に分けて検証した。備中高梁の近代化の特徴はこれら四つの側面がバラバラに進行したのではなく、きわめて緊密に関連し合っているところにあるといえよう。

高梁の近代化を推進した人物には、なかなかの役者が揃っていて目の醒めるような演技を見せた。政治の柴原宗助、医療の赤木蘇平、教育の福西志計子、宗教の二宮邦次郎などである。しかも興味深いことには彼らはすべてマルチ・タレントであった。例えば柴原は政治結社「開口社」を作り、県会議員を務めたが、同時に高梁病院を設立し、順正女学校の初代校長を務め、さらに安息日学校の校長となり、高梁教会が創立されるとまっ先に洗礼を受けた。これらの人達は高梁の近代化の重い扉を開けた偉大な貢献者であった。

ことに宗教の分野では因縁の新島襄もたらしたキリスト教は二宮、赤木、福西達の血のにじむような努力によって高梁という町へ着実に浸透してきた。支持者の中核は医師・薬剤師グループ、小学校教員グループで、資産家・知識人の一部が支援した。しかも敵役にも恵まれていた。島原・天草の乱の討伐軍の指揮官すなわち幕府上使板倉重昌は藩主板倉家の先祖の一員であったから、もともと備中松山藩にはキリシタン嫌いの人が多かったという。

明治十四年の福西志計子の私立裁縫所の設立に始まり、十七年の夏になると高梁の町の伝統的価値の保持者の我慢の緒がついに切れ、プロテスタント史上最大の迫害が燃え上った。迫害の知らせを受けた岡山県令高崎五六はキリスト教への迫害は国際問題になるからと、急いで鎮静させるために岡山市から多数の警部を高梁へ急派したという。

漢訳聖書を読みキリスト教の要理を理解していた泉下の山田方谷は、そのドラマをどのように見たのであろうか。それは近代社会がしっかりと根づくために避けることの出来ない十字架——尊い犠牲であったのかもしれない。

平成二十七年十月

倉田和四生

山田方谷の陽明学と教育実践
目次

| | |
|---------------------------|----|
| はしがき | 1 |
| 序論 岡山県における教育の伝統 | 1 |
| 一 池田光政の心学（陽明学）と教育政策 | 1 |
| 二 森の教育者方谷——世事の儂さ身にしみて | 5 |
| 第一章 板倉勝静と山田方谷 | 9 |
| 一 勝静と方谷の絆 | 10 |
| 二 老中板倉勝静と顧問としての方谷 | 12 |
| 三 方谷の幕府観と戊辰戦争の見方および二人の忠誠心 | 15 |
| 四 備中松山征討と藩の再興 | 18 |
| 五 二人の再会と方谷の死 | 20 |
| むすび | 22 |
| 第二章 山田方谷の陽明学 | 27 |
| 序 中国における気の世界観の展開 | 28 |
| 一 陽明学の基本構造 | 33 |
| 二 方谷の『伝習録』研究 | 39 |
| 三 閑谷学校講義にみる方谷の思想 | 43 |
| 四 山田方谷独自の境地 | 48 |

第三章 陽明学とキリスト教……………55

序 熊沢蕃山、山田方谷およびキリスト教の三つのバンド 55

一 陽明学的教養に導かれて受洗した人 56

二 武士道に接木されたキリスト教 62

三 キリスト教徒による陽明学の評価 69

四 陽明学とキリスト教の類似点 71

五 山田方谷とキリスト教 72

要約と結論 77

第四章 備中高梁の近代化と社会変動……………83

一 備中松山（高梁）における文化的伝統の歴史的形成と発展 84

二 明治新政府による近代化政策の展開 89

三 備中高梁の歴史的、社会的特質 94

四 備中高梁における近代化の諸相 99

五 近代化と地域社会の変容 111

第五章 閑谷学校における山田方谷の教育実践……………117

序 閑谷学校と山田方谷 117

一 『師門問弁録』にみる山田方谷と村上作夫・島村久・岡本巍との質疑 120

| | | |
|-----|---------------------|-----|
| 二 | 谷川達海・島村久・岡本巍に与えた教戒 | 129 |
| 三 | 山田方谷と岡山の英才達 | 133 |
| 四 | 要約 | 135 |
| むすび | ——終焉の光芒 真の教育者としての方谷 | 140 |

第六章 山田方谷の教育理念と使徒達の活動

| | | |
|-----|---------------------|-----|
| 一 | 方谷の教育理念 | 145 |
| 二 | 有終館・牛麓舎で学び高梁で奉仕した人達 | 148 |
| 三 | 閑谷学校で学んだ人達 | 152 |
| 四 | 維新後に東京で活躍した人達 | 160 |
| むすび | ——至誠惻怛 | 166 |

終章 山田方谷に影響を受けたキリスト教徒の活動

| | | |
|-----|-----------------|-----|
| 序 | 三人のキリスト教徒 | 173 |
| 一 | 福西志計子と順正女学校 | 174 |
| 二 | 伊吹岩五郎と『山田方谷』 | 185 |
| 三 | 留岡幸助の営為と家庭学校の理念 | 194 |
| むすび | | 205 |

あとがき